

# 雲叔玄龍

——豊臣秀頼に仕えた薩南学派の僧——

## 林 晃 弘

### はじめに

慶長二〇（一六一五）年六月晦日、徳川家康の指示により書籍計四四三冊の点検が二条城の御殿にて行われた。<sup>①</sup>五月八日の大坂落城で豊臣家は滅亡しており、七月には年号も元和と改められ、大名・朝廷・寺院の法度も定められる。徳川家による全国支配が固まる最終段階の時期である。

ここで点検された書籍は、多くの漢籍を含むものであった。その全貌は以心崇伝が日記に目録を書きつけており、「雲叔上り本」と説明されている。雲叔なる人物は、字を玄龍といい、かつて大隅正興寺の住持をつとめた薩南学派の流れを汲む禅僧である。

周知のように、薩南学派は東福寺聖一派の禅僧桂庵玄樹に始まる宋学（朱子学）の一派である。<sup>②</sup> 応永三四（一四二七）年周防山

口に生まれた桂庵は、京都にて得度し、南禅寺惟正明貞・景召瑞棠のもとで修学する。応仁元（一四六七）年、大内氏の使節に従い明に渡る。文明五（一四七三）年に帰国すると各地を遊歴し、文明一〇年に島津忠昌の招きをうけ薩摩に赴く。同地では新註により四書五経を講じ、『大学章句』を刊行した。また、訓読施点法を改良した。桂庵は永正五（一五〇八）年に没し、その学問は月渚英乗・一翁玄心らにより継承され、文之玄昌に至る。<sup>③</sup>

文之玄昌は弘治元（一五五五）年、日向外浦に生まれた。<sup>③</sup> 幼少時に延命寺天沢のもとで出家し、のち一翁玄心に四書・三体詩を学ぶ。その後、京に上り東福寺龍吟庵の熙春龍喜に従学。天正元（一五七三）年南九州に帰り、大隅・日向の寺院に住した。慶長七年には島津家久が創建した薩摩大龍寺の開山となる。学問においては桂庵の訓読法を補正した文之点が知られる。文之点は門弟

雲叔玄龍（林）

の泊如竹が『四書集註』・『周易伝義』を刊行したことで大きな影響力を持った<sup>④</sup>。また、文之には『南浦文集』などの著作も多い。

中世後期の外交における聖一派の重要性は夙に指摘されている通りであり、桂庵玄樹の薩摩招聘もかかる文脈で理解されている。月渚や文之は島津家の外交関係文書の作成に携わったことが知られている<sup>⑤</sup>。

雲叔玄龍は文之とおおよそ同時代に生きた人である。文禄二(一五九三)年の大隅内之浦への明船来航時に対応した「倭僧玄龍」としてしばしば取り上げられているが、『南浦文集』などに現れる「雲叔」と同一人物であることは十分に認知されていない<sup>⑥</sup>。

後に大坂に移り豊臣秀頼に登用される。雲叔が大坂に赴いたことは既に神谷成三氏により触れられており、大坂時代の資料は個別的には知られているものの、この人物に結びつけては捉えられていない。

本研究ノートでは、雲叔玄龍に関わる資料を集め、その足跡を明らかにする。それほど多くはないものの詩文も残されており、冒頭で触れた旧蔵書とも併せて、当該期における薩南学派の学問や知識を考える前提となる一つの具体像を提供することができるものと考えられる。

また、雲叔は豊臣秀頼の周辺の人物としても、これまでほとん

ど知られていない。金石文や詩文など、これまで十分に活用されてこなかった史料も用いて、薩南学派に属した僧との関わりを明らかにするなかで、秀頼とその周辺についても若干の知見を加える<sup>⑦</sup>。

① 『新訂本光国師日記』三、慶長(一〇)年六月晦日条。

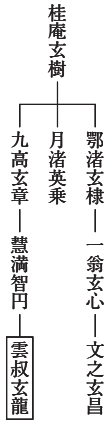
② 薩南学派については、西村天因『日本宋学史』梁江堂書店、一九〇九年。足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』日本古典全集刊行会、一九三二年。今泉淑夫「桂庵玄樹」(『国史大辞典』五、吉川弘文館、一九八五年)。芳賀幸四郎「薩南学派」(『国史大辞典』六、吉川弘文館、一九八五年)。大谷敏夫「薩南学派考」(『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』四五、一九九七年)など。

③ 文之玄昌については、神谷成三「文之和尚の生涯(上)」(『鹿児島大学文科報告四 国文学・漢文学』一九六八年、同「文之和尚の生涯(下)」(『鹿児島大学文科報告五 国文学・漢文学・心理学』一九六九年)、『大日本史料』一二編一三四、元和六年九月三日条。

④ 泊如竹については、松井日俊「儒僧の泊如竹日章」(『桂林学叢』一六、一九九七年)。

⑤ 伊藤幸司『中世日本の外交と禪宗』吉川弘文館、二〇〇二年。

⑥ 「倭僧玄龍」については先行研究でいくつか言及がある。松浦章「明代海商と秀吉「入寇大明」の情報」(『末永先生米寿記念献呈論文集』坤、奈良明新社、一九八五年、のち松浦「海外情報からみる東アジア」清文堂出版、二〇〇九年)は文之玄昌か彼に近い人物とする。佐々木綱洋「都城唐人町の研究」(和田正広・黒木國泰編『華僑ネットワークと九州』中国書店、二〇〇六年)は、正興寺歴代住持の書上から四〇世の雲叔にあたと推定していたが、同「都城唐人町 海に



開く南九州』（玄脈社、二〇〇九年）では文之加点『周易伝義大全』の存在から文之玄昌に比定し直す。

⑦ 豊臣秀頼研究の意義、政治的位置づけに関する研究状況および私見については、拙稿「寺社修造にみる関ヶ原合戦後の豊臣家と家康」、『日本歴史』七九九、二〇一四年。それ以降のものに、福田千鶴『豊臣秀頼』吉川弘文館、二〇一四年。同『慶長・元和期の豊臣「公儀」変質過程の研究』平成二五―二七年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書、二〇一六年。柏木輝久『大坂の陣 豊臣方人物事典』宮帯出版社、二〇一六年。堀智博「豊臣家中からみた大坂の陣」（共立女子大学文芸学部紀要）六三、二〇一七年。拙稿「書評 福田千鶴著『豊臣秀頼』（『織豊期研究』一七、二〇一五年）など。

### 一 大隅時代の雲叔玄龍

雲叔玄龍は、『五山禅林宗派図』<sup>①</sup>によれば、聖一派龍吟門派に属し、桂庵玄樹の曾孫弟子にあたる（図1）。文之玄昌の文集『南浦棹歌』<sup>②</sup>一に所収の「送雲叔禪師之内浦詩序」には、「予之於 雲叔翁、齡後者一十年、若直称朋友、恐有躐等之名矣」とある。弘治元（二五五五）年生の文之より一〇歳ほど年長であった。

なお、『五山禅林宗派図』には「玄龍」の脇に「周龍」と注記されているが、雲叔周龍なる人物は、『大日本史料』九編一五、永正一一（一五一四）年二月一六日条で東福寺に入院したとあり、別人とみられる。

「送雲叔禪師之内浦詩序」の別の箇所には「予与翁、取朋友之交義、亦有何妨乎、況復素為法門之昆弟、而二十年之交義」とある。この詩序は文之が慶長四（一五九九）年に正興寺に入り、それから数年のうちに雲叔が大坂へ移るまでの間のものであり、したがって遅くとも天正一〇年頃には知遇を得ていたと考えられる。

雲叔に関わる史料の初見は、今のところ『上井覚兼日記』（大日本古記録）上、天正一一（一五八三）年二月五日条である。二月四日より上井覚兼らは島津義久の平癒祈禱のため日向法華嶽寺に参籠し、薩摩福昌寺の代賢守仲も同行していた。翌五日、西俣七郎左衛門尉が願主として代賢守仲の寿像を安置して塔頭を造立した。その際に詩歌の席が設けられ、そこに居合わせた「玄龍首座」が、「鳳閣龍樓一主人、雨曇濁世現金身、陞堂玉偈徹三統、野鳥高歌花舞辰」と和韻している。その後、同月八日・一〇日・一四日条にもその姿がみられる。

文禄二（一五九三）年、秀吉の朝鮮出兵が続くなか、日本の情勢を探るために明人史世用・許豫らが商船に扮して大隅内之浦に

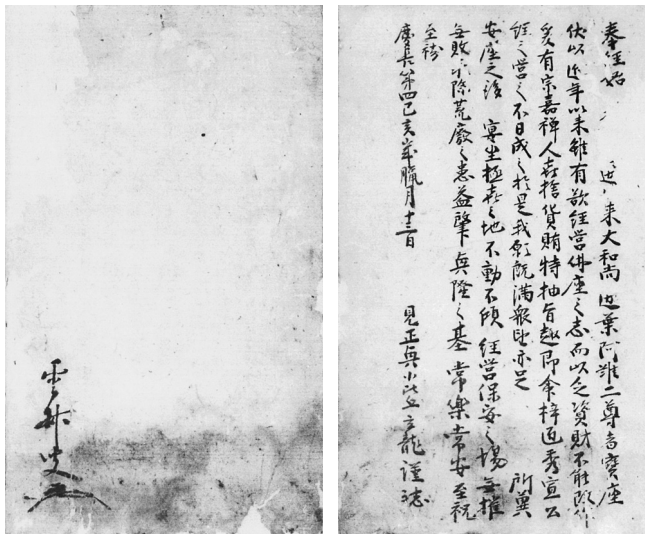
来航する。その時の報告書である許孚遠『敬和堂集』「請計処倭酋疏」に「大隅州正興寺倭僧玄龍」として登場する。雲叔は内之浦に赴き、筆談で明人に来航の真意を問うている。雲叔は、史料上この時以外には島津氏の対外交渉の場面に現れてこないが、他の桂庵玄樹の流れを汲む禅僧と同様に、応対する能力のある人物として把握されていたものと考えられる。

この史料が作成された段階で、既に雲叔は正興寺の住持であった。正興寺は大隅を代表する大社正八幡宮の三本地所の一つで、永仁年中に仏智円応を開山に創建された臨済宗寺院、本寺は建仁寺である。寛文一三（一六七三）年の歴代住持の書上によれば、雲叔は同寺の四〇世である。なお、同史料では「図一」にみえる九高玄章が三三世、その師にあたる桂庵玄樹は三九世とされている。また、文之玄昌は四一世である。

正興寺は大永七（一五二七）年の正八幡宮の大火に罹災しており、雲叔は荒廢した正興寺の再興に尽力する。慶長四年九月に購入した大般若経六〇〇巻を施入しており、次の史料にあるように、同年一二月には本尊釈迦如来像（正八幡宮本地）と迦葉・阿難尊者像の宝座を再興する。

〔史料1〕『島陰集』（東京大学史料編纂所所蔵）附載文書<sup>⑤</sup>

奉経始 「」迦<sup>(カ)</sup>□来大和尚、迦葉・阿難二尊者宝座



『島陰集』（東京大学史料編纂所所蔵）附載文書

伏以近年以来、雖有欲經營仏座之志、而以乏資材不能改作、  
爰有宗嘉禪人、喜捨貨賄、特抽旨趣、即命梓匠秀宣公、經之  
管之、不日成之、於是我願既滿、衆望亦足、 所冀安座

之後、宴坐極喜之地、不動不傾、經營保安之場、無摧無敗、  
永除荒廢之患、益肇興隆之基、常樂常安、至祝至禱、

慶長第四己亥歲臘月十三日 見正興小比丘玄龍謹誌

雲叔叟（花押）

右は東京大学史料編纂所所蔵『島陰集』の奥に綴じ込まれた附  
載文書に記されたものである。『島陰集』は桂庵玄樹の詩文集で、  
この写本は最古のものとして知られている。かかる附載文書の存  
在から、この写本は雲叔旧蔵本であった可能性がある。また、雲  
叔の署名・花押が確認できる史料としても貴重である。

同年六月一七日には雲叔は伏見に滞在していたようであり、相  
国寺の鶴峯宗松が訪ねている。史料上では確認できないが、同門  
の多くの僧と同様に、雲叔も京都で学問を修めていたのであれば、  
旧知の間柄であったのかもしれない。この時の上方滞在は一時的  
なもので、同年七月晦日にはおそらく正興寺のあたりで桂林妙昌  
一三回忌の焼香を行っている。

この慶長四年には文之玄昌が正興寺に移っており、先に触れた  
「送雲叔禪師之内浦詩序」によれば、雲叔と文之は「須臾之間十

往来、講習討論不為少矣」という生活を送っていた。しかし、正  
確な時期ははっきりしないが、雲叔は正興寺を去り、大坂へと向  
かう。後掲の「史料3」によれば慶長七、八年ごろのようである。  
なお、雲叔は大隅にいた期間に西堂への昇進を遂げている。

① 玉村竹二『五山禅林宗派図』思文閣出版、一九八五年。  
文之玄昌の詩文は、鹿児島大学附属図書館玉里文庫の『南浦文集』  
（二冊）・『南浦戲言』（一冊）・『南浦禪歌』（三冊）による。玉里文庫

本は版本に収録されていない詩文を多く収める。自筆本ともされるが  
未詳。神谷成三氏の解題（玉里文庫目録作成委員会編『玉里文庫目  
録』鹿児島大学附属図書館、一九六六年）を参照。本稿では国文学研  
究資料館「館蔵和古書目録データベース」の公開画像を利用し、二〇  
一五年二月の「書物・出版と社会変容」研究会鹿児島大会の玉里島  
津家文庫見学会にて実見した。

③ 『上井覚兼日記』上は天正三年二月一三日条の「宮内正興寺」に  
も「玄龍」と傍注を付す。

④ 『明経世文編』五（中華書局影印）巻四〇〇。米谷均「訳注『敬和  
堂集』―請計処倭酋疏』（平成二二年度〜一五年度科学研究費補助金  
（基盤研究（A）（一））研究成果報告書『8〜17世紀の東アジア地域  
における人・物・情報の交流』（上）、代表者村井章介、二〇〇四年）。

⑤ 「正興寺跡」（『日本歴史地名大系四七 鹿児島県の地名』平凡社、  
一九九八年）。大隅正八幡宮周辺は近年発掘調査が進んでいる（重久  
淳一「大隅正八幡宮境内及び社家跡」の調査、『日本歴史』八〇一、  
二〇一五年）。

⑥ 『寺社調』（東京大学史料編纂所所蔵・島津家本）九。

⑦ 伊地知季安「国分正興寺仁王輪岳様御真影一件愚考」（『鹿児島県史

料』旧記雜録拾遺伊地知季安著作史料集八)。

⑧ 『南浦棹歌』一、「夫大般若波羅蜜經者、大乘之正經……」。

⑨ 原本は状態が良くないため現在閲覽できない。本稿では同所蔵のマイクロフィルムを用いた。

⑩ 高津孝・岩川拓夫「校本『鳥陰漁唱』(一)」(『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』七三、二〇一二年)。

⑪ 『鹿苑日録』三、同日条。ただし、別人の可能性もある。

⑫ 足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』日本古典全集刊行会、一九三二年。

⑬ 『南浦棹歌』一、「己亥之歳夷則之晦、即桂林妙昌十三回之諱辰也……」。

⑭ 『南浦文集』二、「○首座芳公在雲叔西庵之門……」。

## 二 大坂時代の雲叔玄龍

大坂に移ったのち、現時点で把握している最初の事績は、奈良県宇陀市平井の飛來寺に伝來する次の木像銘である。

〔史料2〕 飛來寺永田林齋像銘<sup>①</sup>

維時慶長十年十一月吉日 左旨趣者、

爰江州路高島郡之産、俗名永田

筑後守、入道而号林齋事、

<sup>(大闡)</sup> 大闡殿年尚矣、代々至当国主

右大臣秀頼公、不怠巾盤之役侍傍勤之、

大臣在幼年時、命工令拙老貌刻之曰、此林齋

也、大笑曰、抱此偶人去為汝遺像手乃

丞拝領之、以帰家者也、林齋一日抱偶

人来謂予云、願加一語示子々孫々者也、

於是予代云、三世諸仏同聚會、十方

聖賢悉降臨、又云、皆令離苦得安穩、衆

世間至樂及涅槃樂、且喜一句、作麼生、

唵 虚空一抹蔭涼子葉孫枝功德林

雲叔誌

秀吉の代から豊臣家に仕え、秀頼の「巾盤之役」を勤めて近侍した永田林齋の木像である。像高は約二六・五cm・膝張約二二・〇cm。眉毛や襟などは墨書されている。

この木像を刻ませた秀頼は、「此林齋也」と大笑し、「遺像」にするようにと林齋に手ずから与えたという。相貌がよほど酷似していたのであろう。その経緯を子々孫々に伝えたいと考えた林齋は、ある日雲叔のもとを訪れ作文を求めた。雲叔はそれに応え、文章と句を作成した。そして木像の背面に陰刻された。

永田林齋は織田信雄(常真)と関係が良好であったことから、次男正広が織田家に仕え、宇陀郡平井村の代官となっている。本像は同家一二代永田規矩夫氏により同地の飛來寺に寄進されたものである。この銘文から、雲叔はこの頃には秀頼の近臣とも交流



飛来寺永田林斎像

があることが知られる。

慶長一年三月一八日、大坂に下向した鶴峯宗松は、片桐且元の屋敷で夕飡を振舞われた。その席に雲叔も相伴している<sup>③</sup>。

同年六月下旬、文之玄昌が大坂に上り雲叔を訪ねている。その時に作成した詩が『南浦文集』に収められている。

〔史料3〕『南浦文集』二一

○嘲<sup>ル</sup>雲叔翁<sup>ヲ</sup>一詩

慶長丙午林鐘下澣、予訪<sup>フ</sup>雲叔翁<sup>ノ</sup>之新寺<sup>ヲ</sup>、瓦屋數間、頗雖<sup>ル</sup>坐<sup>レ</sup>壯麗<sup>ニ</sup>、内無<sup>ニ</sup>心門五尺之童<sup>ヲ</sup>、外無<sup>ニ</sup>掃<sup>レ</sup>塵夕陽之僧<sup>ヲ</sup>、翁獨坐<sup>シテ</sup>、軒<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>、深擁<sup>レ</sup>門一戸<sup>ヲ</sup>、不出<sup>レ</sup>其頭<sup>ヲ</sup>、可<sup>レ</sup>怪<sup>シム</sup>乎哉、昔者孺悲欲<sup>ス</sup>見<sup>レ</sup>孔子<sup>ヲ</sup>、々々辭<sup>ス</sup>以<sup>レ</sup>疾者、孺悲之惡形<sup>ニ</sup>於外<sup>ニ</sup>也、翁今不<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>予者<sup>ヲ</sup>、以為<sup>ニ</sup>予有<sup>ニ</sup>孺悲之惡<sup>ニ</sup>乎、抑亦不屑<sup>ス</sup>之教誨乎、未<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>知也、若夫比<sup>ニ</sup>予於孺悲<sup>ニ</sup>者、猶可<sup>ナリ</sup>也、比<sup>ニ</sup>翁於孔子<sup>ニ</sup>則未<sup>シ</sup>也、且夫翁之為人<sup>ヲ</sup>、扶<sup>シテ</sup>智能技芸之才<sup>ヲ</sup>、其志素驕<sup>リ</sup>且吝<sup>シ</sup>、我之所好者、如<sup>レ</sup>將<sup>レ</sup>加之<sup>ニ</sup>膝<sup>ニ</sup>、我之所惡者、如<sup>レ</sup>將<sup>レ</sup>墮<sup>レ</sup>之淵<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>愧<sup>シ</sup>己<sup>ノ</sup>之學不<sup>レ</sup>堅<sup>シ</sup>、患<sup>ニ</sup>人之不<sup>レ</sup>己<sup>ヲ</sup>知<sup>ル</sup>、是故、雖<sup>シテ</sup>在<sup>ニ</sup>我父母之邦<sup>ニ</sup>、其笑不<sup>レ</sup>黔<sup>シ</sup>、其席不<sup>レ</sup>煖<sup>シ</sup>、三四年前乘<sup>レ</sup>桴浮<sup>ニ</sup>于海<sup>ニ</sup>、延<sup>シ</sup>綠<sup>シテ</sup>於棋州之葦間<sup>ニ</sup>、售<sup>ル</sup>名求<sup>ル</sup>利者、七八月、於是<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>從<sup>ニ</sup>者見<sup>ニ</sup>之於秀頼幼君<sup>ニ</sup>、々々寬仁<sup>ニ</sup>而愛<sup>レ</sup>人<sup>ヲ</sup>、大度<sup>ニ</sup>而施<sup>ス</sup>物<sup>ヲ</sup>、泰山不<sup>レ</sup>讓

土ノ境、河海ハト云、細流、幼君ノ謂乎、翁幸遇斯之時、偶得侍廊廡之間、以爲身化眞龍矣、今以予爲故魚、而不出頭者、何其局量之褊淺、而容受之弗弘哉、古有訪人者、其人不出頭而応焉、終向門上、一題鳳字而帰、一書午字而去矣、書午字者、其人牛、而不出頭、題鳳字者、謂其一人爲凡鳥也、此二人者、雖不出頭、其探一也、予今雖不題一字、豈可黙乎、戲偷唐人之格、漫賦一詩、以述卑懷、翁若伝而見之可也、

寂戸敲無五尺童、君今未敢啓昏蒙、欲題鳳字知相訪、又恐權門易破風、

大意は、大坂に來た文之玄昌が、雲叔の寺を訪ねてみたものの、門に取次をする童子はおらず、掃除をする僧もみえず、雲叔は寺のなかから出てこない。文之玄昌はあるいは孔子が孺悲に会おうとしなかつた故事を踏まえたものかと訝しがり、応対を受けなかつた客人が「鳳」「午」の文字を残して帰つた故事を踏まえた詩によつて、客人に対する態度が不遜であつた雲叔を戒めようとするという内容である。

この史料からは、雲叔はこれより三、四年ほど前に大坂に居を移しており、そこで秀頼に登用されたことが知られる。「瓦屋敷

間、頗雖壯麗」という新寺に住していることがわかるが、これは秀頼から与えられたものであろう。慶長一八年正月一二日に、相国寺の所叔頭暉が雲叔を尋ねており、そこには「到龍雲院雲叔和尚」とある。雲叔の寺は龍雲院と称されていたものと思われる<sup>⑤</sup>。豊臣秀頼は畿内近国を中心に多くの神社仏閣を修造したことが知られている。摂津生玉神社と神宮寺法案寺もその対象となり、慶長一一年に再建された。法案寺に施入された銅鐘（大坂陣後に京都本禅寺へ移され現存）の銘は雲叔によるものである。

〔史料4〕旧生玉社法案寺銅鐘銘<sup>⑥</sup>

南瞻部洲大日本国摂洲関郡

生玉大明神者本地医王如来也、仏宇神社之荒廢雖歷乎幾世、

無修造一字之施主、伏以可謂億兆之君師

正二位右大臣豊臣朝臣秀頼公欲企營締之志厚而、乃命片桐東市正且元、且元謹奉 鈞命、始于孟春终于季秋、其壯觀也、珠璣金棟輪困尺美矣、晷鐘之設亦復速成就也、誠時至乎矣、

明神之擁護与

聖主之至德恰如符節相若世、左右逢源此功德焉、仰瞻末代

耳、鐘銘曰、

築再興地 開百福田 鍛冶炉輔 造建台輓 蘭若高聳  
蒲牢新懸 百八杵數 三世機縁 瑠璃殿上 水晶簾前



鯨吼巨海 龍踊深淵 控擊有節 韻響無遍 上通兜卒  
下資黃泉 姑蘇城外 遠到客船 長樂宮裡 常濕御筵  
五畿七道 千歲万年 撫育民戶 祝延

皇天

皆慶長十一年丙午黃鐘吉辰

積門小比丘雲叔叟玄龍謹書

住吉中在家

鉄屋大工松井五兵衛尉宗次

秀頼修造寺社に残されるものなかで雲叔の手になることが判明するものは、今のところ右の鐘銘のみであるが、その学知・作文能力が一連の再興事業のなかでも活かされたことがわかる。

次の史料は智積院第二世祐宜が雲叔に宛てた書状（案文か）である。慶長一五年に着手される東山大仏の再建がある程度進んだ段階のもので、祐宜が没する慶長一七年一月以前のものである。

〔史料5〕「智積院文書」（東京大学史料編纂所架蔵影写本）一

尚々、貴僧へ御音信までニ松茸一折進之申候、以上

態使僧越申候、正月者尋申候得共不能拝顔候、此度当寺之論談ニ付而、日本之客僧衆数多被參候ニ、部屋少候て堪忍不能成迷惑仕候、先年百問御造可給由候得共、三十間出来申候て七十間于今調不申候、此度大仏之番匠等之小屋あまた御座候

を百間ハかりも申請度候、若不然者あししろの木を百間ハかりも造申候程申請度候、片桐市正殿（且元）へ態使札進之候、貴僧御同心候て調申候様ニ平ニ憑入申候、跡ニ御座候所化衆之部屋も悉破申候、寺領者少分故修理等も不罷成候間、当寺にて論談申候へ者、豊国明神へ之御法楽ニも罷成候間、御塩味候様ニ任入候、恐惶謹言

十月六日

雲叔

進覽候

智積院僧正

祐宜（花押）

祐宜は全国から論談に智積院を訪れる客僧のため坊舎の拡張を望み、東山大仏の番匠衆の小屋や足代の材木をもって造営したいと片桐且元に願ひ出た。そして、その口添えを雲叔に求めている。雲叔は造営の請願を有利にすることが期待できる立場にあった。また、五山僧以外とも交流があったことがわかる。

雲叔は慶長一四年一月三日付で諸山の摂津光雲寺、慶長一五年正月一九日付で十利の真如寺、同年二月二三日付で五山の東福寺の住持に任じられる。⑦のちの大仏鐘銘事件に伴う公帖の調査によれば、有節瑞保の申次によって実際に將軍徳川秀忠の公帖が発給されたことが判明している。⑧

① 『奈良県宇陀郡史料』（奈良県宇陀郡役所、一九一七年）、『菟田野町史』（菟田野町史編集委員会編、一九六八年）、『奈良県史』一七卷金石文（下）（奈良県史編集委員会、一九八七年）で紹介されている。二〇一六年二月三日に調査し、翻刻を改めた。なお、改行は原文の通りである。

② 篠川直『柏原織田家臣系譜』、一八九一年。

③ 『鹿苑日録』四、同日条。

④ 玉里文庫本『南浦文集』は一部の詩文には漢文訓読の補助記号、振り仮名・送り仮名等が付される。翻刻のうち、冒頭の丸印と読点は朱筆である。一部を除く堅点と朱引きは省略した。

⑤ 『鹿苑日録』五、同日条。

⑥ 高島伸『大坂落城を見た釣り鐘』、一九九一年。なお、本禅寺移送後の追刻部分は省略した。

⑦ 『鹿苑院公文帳』（史料纂集）、三八頁・七四頁・一二七頁。

⑧ 『新訂本光国師日記』二、慶長一九年八月一日条。

### 三 大坂陣後の雲叔玄龍

大坂の陣における雲叔の活動は見いだせていないが、陣後のものに次の史料がある。

〔史料6〕『大日本古文書 観心寺文書』六六二号<sup>①</sup>（傍線筆者）

猶々、右之通に候、何事も罷下可申承候、以上

持明院・尺賀院と仕合能御礼済候而、於我等大慶ニ存候、  
（以心崇伝）  
 金地院様へも寺中之儀委申上候、御兩人衆御聞被成候間、其

方二而可被仰候、拙者儀御前へ被召出候而、仕合無残所候間、御心安可有候、然者うんしゆく御道具之儀、数七ツ持明院へ御渡可被成候、書物之儀ハ只今上り申候、さいりやう下候間、人足之儀者か、田又十郎方へ申越候、御談合候而可被仰付候、何事も罷下、貴面に万々可申述候、恐惶謹言

甲斐庄喜右衛門尉

六月六日

正房（花押）

観心寺

御寺中参

雲叔の所持していた道具七点が観心寺持明院に渡されることになったという。また「書物之儀ハ只今上り申候」という記述は、冒頭で触れた次の史料と関係するものである。

〔史料7〕『新訂本光国師日記』三、慶長二〇年六月晦日条

一、六月晦日、二条之御殿にて雲叔上り本点檢仕候へと被仰出候而、宗哲・上田善次各教寄屋之御書院にて致校合、書立被申候目録とも上候、案左二有、

一、書籍日記

一、左伝但一冊不足書本也

一、詩経朱氏註

十九冊

一、毛詩但鹿本

五冊全

三冊全

一、中庸

一冊全

（中略）

〔表1〕『本光国師日記』慶長20年6月晦日条 書籍目録

	書名	冊	備考
46	前漢書	7	— 但大不足
47	御製文集	1	— 但不足
48	洪範内篇	1	— 但大不足
49	礼記	8	— 但奥不足
50	貞和集	2	— 但不足
51	宋元通鑑	7	— 但不足
52	論語大全	6	— 但取合本不足也
53	四書上論	4	— 但不足
54	東萊先生 三篇	4	— 但大不足
55	綱目通鑑	5	— 但大不足
56	朱氏大全	3	— 但大不足
57	柳文	1	— 但大不在
58	国朝儒先録	2	— 但不足
59	周易大全	3	— 但不足
60	首楞嚴	3	— 同
61	孟子書	6	— 同
62	孟子問書	1	— 同
63	大学衍義	1	— 同
64	大学中庸	1	— 同
65	毛詩	2	— 同
66	古文真宝前集	1	— 同
67	大学輯略	1	— 同
68	少微通監	2	— 同大不足
69	対類	3	— 同
70	山谷抄	3	— 同
71	諸氏文献	8	— 同
72	礼部勻	2	— 同
73	五星台歴	9	— 但曆書也
74	年代記	4	— 同
75	職原抄問書	1	— 同
76	性理大全	1	— 同大不足
77	宋監	2	— 同大
78	仁川世稿	1	— 同
79	歴代通監	2	— 同
80	東坡	5	— 大小同
81	山谷	2	— 同
82	晦庵語録	1	— 同大
83	古今歴代	1	— 同
84	小学	1	— 同
85	七政台	1	— 同
86	天玄賦	1	— 同
87	鼓吹統編	3	— 同
88	空谷集	1	— 同
89	杜詩	1	— 同大
90	事林広記	1	— 同
91	皇花集	2	— 同
92	礼記	1	— 曲礼
93	文献通考	1	— 同大

	書名	冊	備考
1	左伝	19	— 但一冊不足書本也
2	毛詩	5	全 但龜本
3	詩経	3	全 朱氏註
4	中庸	1	全 —
5	大学意意中庸法	1	全 —
6	大学指南	1	全 —
7	綱鑑	4	全 但閉様乱雜
8	中庸或問	1	全 —
9	孟子集註	3	全 —
10	中庸大全	1	全 —
11	曆法通書	4	—
12	東坡	15	全 高麗大本
13	三重勻	1	全 付序一冊別在
14	老子筮	1	全 —
15	司馬法尉繚子大宗問答	3	全 —
16	廬山外集	1	全 —
17	古文真宝後集	1	全 龜本
18	山谷	4	全 龜本
19	百中経	1	全 但曆書也
20	紹運図	1	全 —
21	押勻淵海	10	全 —
22	孝筮	1	全 —
23	山谷仮名抄	4	全 —
24	藏叟摘彙	1	全 —
25	古註彙求	3	全 —
26	聯珠詩格	5	全 —
27	胡曾詩	1	全 —
28	秦漢文書	4	全 —
29	神皇正統記	5	全 —
30	式目抄	1	全 —
31	六物園抄	2	全 —
32	三鉢詩	3	— 但總勻龜本
33	職原抄	2	全 —
34	千字文石韻	1	全 —
35	法花科註	8	全 —
36	観音懺法	2	全 —
37	念誦懺法抄	1	全 —
38	地藏本願筮	1	全 —
39	大惠書	1	全 —
40	四教義	2	全 但一冊ハ抄
41	観音陀羅尼経并諸呪	1	全 —
42	大学集註	1	全 —
43	中庸大全并或問	2	全 —
44	孟子	6	— 但一冊不足
45	孟子大全	6	— 但一冊不足

（ここまでで「以上四十五部」とある）

注) No54「■」は「評」か「評」、No113「■」は「鑑」か「讀」。

	書名	冊	備考
94	二程全書	1	同大
95	奉先雜儀	1	同
96	義之十七帖	1	同
97	靖節文集	1	同大
98	莊子	1	同
99	清異錄	3	同
100	国語	2	同
101	蒙求抄	1	同
102	企斎集	2	同
103	通監帝王図	1	—
104	估畢集	1	同大
105	將監	1	同
106	礼記	1	檀弓同
107	大藏一覽	1	同大
108	杜詩抄	3	同
109	花神三妙	2	同
110	昌黎集	2	同大
111	資治通監	1	同大 / 書本也
112	文式拔書	1	—
113	仏書録	1	但不足
114	碧山堂集	1	—
115	論語抄	4	但不足
116	秘密諸筭請呪	1	—
117	智者略教	1	—
118	三昧詩抄	3	但二三之卷
119	古文真宝開書	1	—
120	勸学文	1	—
121	金剛經註	1	—
122	施餓鬼註	2	—
123	碧岩抄	2	但不足
124	千家詩	2	同
125	曉風集	1	同
126	礼記大全	1	同
127	倭漢禪利次第	1	—
128	鏡湖集	1	—
129	水老鶴	1	兼彦仮名抄
130	風雅集	1	—
131	愚慮草	1	—
132	子昂石摺	1	字書
133	中興抄	2	但不足
134	註千字文	1	—
135	作口記	1	—
136	法花至開書	1	—
137	古則紳紙	1	—
138	大唐名藍図	1	—
139	(諸法語仏事共)	16	—
140	(詩集共)	33	—
141	(不具雜本)	57	—

以上四十五部

- 一、前漢書但大不足 七冊 一、御製文集但不足 一冊  
 一、洪範内篇但大不足 一冊 一、礼記但奥不足 八冊  
 (中略)  
 一、詩集共 卅三冊 一、不具雜本 五十七冊  
 右雲叔上り本

慶長廿卯六月晦日点検之、

右如此目錄本共二宗哲二相渡也、

雲叔の旧蔵書が二条城に持ち込まれ、片山宗哲・上田善次によ

り点検された。全体像は「表1」として示した通りで、一三八部  
 (雑本等は除く)、計四四三冊である。前半の「以上四十五部」  
 までは比較的状态のよい本を選別したものと思われる。後半は不  
 足本が多い。戦乱のなかで散逸した可能性もあり、本来はより充  
 実した蔵書群であったのではなからうか。

書名から判断する限り多くは漢籍であり、四書とその注釈書類  
 が際立つ。特に、朱氏註との注記があるNo.3詩経、朱子の語録で  
 あるNo.82などがある点は薩南学派の特色を反映したものと見え  
 う。

それ以外では歴史書のほか、詩文関係のものが目立つ。仏書はそれほど多くはないようで、若干の和書も含まれている。

これらは大隅正興寺時代のものが基礎となつているのか、大坂時代に入手したものが大部分を占めるのかは判断できない。文之玄昌が直接訓点を書き入れた『周易伝義大全』は文禄二年に朝鮮から持ち帰られたものである。時代背景として朝鮮出兵に伴う漢籍の流入を考える必要もある。

雲叔の蔵書は前掲の〔史料6〕でも関心が向けられており、崇伝も目録を書き留めているように、同時代からそれなりに知られていたものと思われる。このころ書籍の蒐集に熱心であった徳川家康の興味を引いたことは想像にかたくない。ただし、片山宗哲に預けられた後のことは未詳である。選別されたもののうち比較的良いものは家康の文庫に引き継がれたのではないかと思われるが、明確なものはない。<sup>④</sup>

① 二〇一六年二月の観心寺文書調査の際、原本を確認する機会に恵まれた。『大日本古文書』が「うんしやく」と翻刻する箇所は、「うんしやく」と読んで差し支えないものと判断し、修正を加えた。

② 〔表1〕作成にあたっては、『新訂本光国師日記』三と『大日本史料』一二編―二の翻刻を参照し、東京大学史料編纂所架蔵写真帳と全国漢籍データベース協議会「全国漢籍データベース」にて書名を検討した。なお、No.54・113・135は正確な書名を確定しえていない。

③ 村上雅孝「文之玄昌と『周易伝義大全』」（『日本文化研究所研究報告』二五、一九八九年、のち同『近世初期漢字文化の世界』明治書院、一九九八年）。

④ 〔史料1〕の『島陰集』はリストに見えない。この写本には近代に加えられた罫紙（神戸桐月社梓）があり、勤皇家の建仁寺僧として知られる梧庵が、雲叔について考証を加えている。高津孝・岩川拓夫「校本『島陰漁唱』」（一）（前掲）参照。

## おわりに

本研究ノートでは薩南学派の禅僧である雲叔玄龍の関連資料を集め、その事績を明らかにしてきた。

雲叔は大隅正興寺の住持として、同門の文之玄昌らと親しく交わり、学問を深めていた。また、戦国期に荒廃した同寺の復興を進めていく。領主島津氏からは、明から来航した人物への応対を求められることもあった。

その後、雲叔は大坂へ赴く。同地では豊臣秀頼に附属させられた大坂衆や、京都五山の禅僧と交流があり、智積院の僧とも接点があった。秀頼に近侍した永田林斎は、拝領した木像の銘文を雲叔に求めている。また、秀頼が造営した生玉社神宮寺法案寺の銅鐘銘の作文を任せられているように、公的な面でもその学知を發揮することがあった。秀頼からは新しく寺院を与えられ、厚遇さ

れていた。このような在り方は、やや特殊な事例かもしれないが、薩南学派の僧の活動範囲の広がりを考える上で興味深い。

冒頭で触れた大坂夏の陣後に二条城で点検を受けている一群の書籍は、このような来歴の僧のもとにあったものである。これらの書籍が集積された過程などについてはさらなる検討が必要であるが、薩南学派の僧がどのような知識を受容していたかが判明する。その学問の基盤の一端が具体的に明らかになった。

雲叔を登用した秀頼は、生母浅井茶々など周囲から天下人としての教養を習得することが期待されていた。<sup>①</sup>例えば、慶長一年に出版された秀頼版『帝鑑図説』には西笑承兌が跋文を記しており、そこには「右相府秀頼公及見此書、手之口之寅夕無不披覽也、仍命工刻于梓而寿其伝於無窮也」とある。<sup>②</sup>また、明経道を家学とする公家の舟橋秀賢は、度々大坂へ下向し漢籍を進講しており、秀頼自身も一定の関心を有していた。<sup>③</sup>小稿で明らかにした成果によれば、秀頼は、薩南学派の禅僧の学知とその蔵書にも触れることが可能な環境にあったといえよう。

ところで、大坂陣後の道具・蔵書の行方は史料上で確認できる一方、雲叔その人の消息は今のところつかめていない。ただ、か

つて住持をつとめた大隅正興寺の旧墓石群（弥勒院・正興寺等墓域、両寺とも廃仏毀釈のため廃絶）のうちに「雲叔和尚」とのみ刻まれた無縫塔が残されている。<sup>④</sup>大坂陣後に大隅へ戻りその生涯を終えたのかもしれないが、あるいは旧友で同寺四一世となった文之玄昌が供養塔として造立した可能性もあろう。

① 中村孝也『淀殿と秀頼』国民文化研究会、一九六六年。井上安代『豊臣秀頼』自家版、一九九二年。同『豊臣秀頼年譜補遺』続群書類従完成会、一九九四年。福田千鶴『豊臣秀頼』吉川弘文館、二〇一四年。

② 国立公文書館所蔵（請求番号二九七〇一六二）。

③ 『慶長日件録』（史料纂集）一、慶長一〇年一〇月一〇日条など。

④ 藤浪三千尋「始良郡単人町宮内正興寺跡歴代住職墓塔群と関連の墓石塔について」（『南九州の石塔』八、一九八九年）。『単人町の石造文化財』（改訂版）、霧島市教育委員会、二〇〇七年。二〇一五年二月六日に現地調査を行った。

#### 〔付記〕

調査にあたってご高配を賜りました資史料所蔵者の皆様に厚く御礼申し上げます。なお、本稿は「原本史料情報解析による複合的史料研究の創成事業プロジェクト」（東京大学史料編纂所内研究プロジェクト）の成果の一部である。

（東京大学史料編纂所助教）

Unshuku Genryū, a Priest of the Satsunan School who Served  
Toyotomi Hideyori

by

HAYASHI Akihiro

This study elucidates the achievements of the little-known monk Unshuku Genryū. Unshuku belonged to the Satsunan school, a branch of the Neo-Confucianist thought of Zhu Xi that was founded by Keian Genju and that flourished in southern Kyushu in the late middle ages. The famous Bunshi Genshō was Unshuku's contemporary and a member of the same school. The two maintained close relations with one another.

Unshuku was born circa 1545. The entry in the *Uwai Satokane nikki* for the fifth day of the second month of 1583 is the first mention of Unshuku in a written source. At that time he participated in a Chinese poetry gathering at Hokedakeji, a temple in Hyūga province. His reception of a Ming ship in Uchinoura bay in Ōsumi, where he communicated by means of an exchange of notes written in Chinese, is well known. He was capable of conducting diplomatic negotiations with foreigners, as were other monks of the Satsunan school. He also served as the abbot of Shōkōji, a temple in Ōsumi, which he strove to revive, donating Buddhist scripture and statues. Bound within in the *Tōinshū*, a collection of Keian Genju's poetry in Chinese that is found at the Historiographical Institute of the University of Tokyo, are writings by Unshuku by which his stylized cipher and signature can be confirmed.

Unshuku moved to Osaka around 1602-1603. There he served Toyotomi Hideyori, the late Hideyoshi's son and heir. Unshuku composed the inscription for the bell of Hōanji, which had been revived by Hideyori in 1606. He was favored by Hideyori and given a temple as his residence. He also developed relationships with Hideyori's close advisors. For example, Unshuku's words were inscribed in a wooden statue of Nagata Rinsai found in Hiraji temple in Uda.

After Hideyori was vanquished in the Summer Siege of Osaka Castle in 1615, a portion of Unshuku's possessions was transferred to Kanshinji temple in Kawachi. Furthermore, a number of the books that Tokugawa Ieyasu had

examined at Nijō Castle were from the former collection of Unshuku. A catalogue of the collection is found in the diary of Ishin Suden. There were 443 volumes, most of which were in Chinese and many concerned Zhu Xi's thought. As the titles in the catalogue appear to be incomplete, it is likely that the original collection contained many more books. Although I was unable to fully clarify how the original collection was assembled, one can see what sorts of books a monk of the Satsunan school would have possessed, and it is also possible to approach an understanding of the type of scholarship that attracted Toyotomi Hideyori.